
コガレ

光太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コガレ

【Nコード】

N8488E

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

金の布に横たわる、ひどく精巧な人形。言葉にならない想いを胸に、絵美亜は今日も、美術館を訪れる―― イラスト小説企画『小説風景12選』 9月 参加作。乙麻呂先生のイラストを元にした物語です

この想いを、なんと呼べばいいのだろう。
近くて遠いのは、憧れ。

もしかしたら、焦燥、嫉妬……恋、のような何か。

あなたに、なりたい。

*

「似てるんじゃないかな」

うしろから聞こえた無責任な声に、ショートカットを揺らして振り返る。

あたしは返事をするのも忘れ、エイリアンでも見るような目をしてしまった。

聞き間違いかと、耳を疑う。
似ている、などと。

「ひどい顔するなあ。褒め言葉のつもりだったんだがね。絵美亜くん、色白だろう。体型も華奢だし」

いかにも心外そうに肩をすくめながら、平べったい四角い箱を抱えて、巴さんが歩いてくる。吉元巴、この美術館の館長だ。幼いころから、学校帰りに直行してくるあたしを咎めるでもなく、優しく接してくれる。

気を許せる、大切な存在。

大好きな人、だけど。

そういう冗談をいうひとだっていうのは、知らなかった。

「なにそれ。もう、皮肉にしか聞こえないよ。セーラー服着てたって男に間違われるあたしが、これに似てるって。こんなに美人だったら、とっくに人生バラ色だよ」

「似てるよ。モデルになった女の子が当時十七だったというから、年齢も同じぐらいだろう」

驚いた。十七歳、まさに今日、なったところだ。

似ている、を撤回する気はないらしい巴さんを、じろりと一瞥。確かめるためというわけでもないけど、フロアの中央に横たわる人形に、もう一度視線を落とした。

膝辺りまでしかない青い柵の向こう側、床よりも一段高くなったディスプレイに、金の布が敷かれている。その上には、まるで今にも動き出しそうな、少女の人形。

美術館ができたのは、十年ほど前だっただろうか。そのころからずっとある、ひどく精巧な人形だ。

だだっ広いこのフロアには、この人形だけ。ネームプレートには、「初枝」としか書いていない。考えてみれば不思議な話だけど、深く考えたこともない。人形にまつわる歴史だって、何も知らない。そんなことは、どうだっていいのだ。

まるで人間そのもののなのに、決定的に違う姿。その姿に、あたしはずっと、惹かれていた。

理由はよくわからない。

惹かれている、というのも、本当は違つかもしれない。
うまく言葉にならないのだ。

「お客様、そろそろ閉店時間ですが」

長い付き合いなのに、わざと慇懃無礼ない方。
閉館のアナウンスは、もうとつくに流れて消えた。第一、入館料
なんて払ったことないのに、お客様って。嫌味だ。

「いつもはもうちょっとサービスしてくれるじゃん。どうせ帰って
も誰もいないし。もう少しさせてよ」

お願いの上目遣いを披露すると、巴さんは苦笑した。
知ってる。しょうがないな、とかいいながら、巴さんはあたしに
甘いんだ。

お姉ちゃんたちと違って、とりたてて長所のないあたし。パパも
ママも、あたしのことなんていらなみたいだけど。

巴さんは、ちゃんと、優しい。

「しょうがないな」

案の定、巴さんはそういつて肩をすくめた。

「けど今日は、ちょっと忙しいんだ。展示品の入れ替えがあつてね。
新しい着物が手に入って」

「着物？」

思わず、甲高い声をあげてしまった。

「入れ替えて……え、もしかして、この人形の着物？ どういう

こと？」

「美術品として価値があるのは、人形本体よりも、むしろ着物の方なんだよ。そんなことも知らずに見てたのかい」

知らなかった。ちょっとショックだ。

こんなに綺麗な人形なのに、この子自体には、価値はないのだろうか。

十年通っているけど、新しい着物の登場なんて初めてだ——そう思ったら、ちょっと興味が湧いてきた。

面白いかも。

「ね、その着物、見せて！」

巴さんは目を丸くした。どうせ明日になったら見られるのにつて、そんな顔だ。

でも、次の瞬間には、しょうがないなって、いつもみたいに肩をすくめる。そこでやっと、あたしは気づいた。このフロアに入ったときから持つてる、四角い箱。

「……もしかして、それ？」

「まあね」

あたしの目は、巴さんの腕の中の箱に釘付けになった。

それほど嚴重そうにも、価値がありそうにも見えない、普通の箱マーケットで安売りの浴衣を買ったって、これぐらいの箱に入られてくれそうだ。

なんだか、じりじりした。

一度気になってしまっっては、もうそこから目が離せそうにもなかった。一刻も早く見てみたい。そういう特別って、わくわくする。

突然、シンバルを打ち鳴らしたみたいな大きな音が響いた。なんだか叱られたようで、あたしは身を縮こまらせてしまう。

ケータイの着信音だった。巴さんの、だ。オーケストラが続く。はい、と電話に出て、なんだか難しそうな会話。見上げるあたしと目が合つて、巴さんはちよつと困つたような顔をした。

ケータイはそのまま、あろうことが、着物が入っているという平たい箱を、床に置く。

「ちよつと急用だ。ここに置いておくけど、触っちゃだめだよ。あとでちゃんと、見せてあげるから」

ケータイを離して、あたしにそう忠告する。

返事も待たず、もしもし、と会話に戻ると、フロアから出て行つてしまった。

取り残された。

広いだけのフロアに、一人。

「触るなつて……」

ため息が出る。

価値のあるという着物を、こんなふうになにに置き去りにして。あたしが泥棒とかだつたらどうするんだらう。信頼されてるってことなのかもしれないけど。

あたりまえに、箱の中身が気になった。

巴さんはいない。

だれもいない。

——着物には触らなくても。紐を解いて、箱を開けて、ちよつと覗くぐらいなら。

たったそれだけだ。たいした罪悪感もない。あたしはほとんどためらわずに、浅葱色の紐を引くと、そつとふたを持ち上げた。

息を飲んだ。

濃い茶色の、無地の着物。価値なんて、もちろんわからないけど。人形に抱くのと酷似した感情が、芽生える。いてもたってもいられなくなる。

「着てみたい」

思わず、声になっていた。

これを着たら、どうなるだろう。髪だって短くて、もちろん美人でもないし、あたしが着たところでどうにかなるなんて、思っていないけど。

でも、近づけるかもしれない。

彼女のように、なれるかもしれない。

状況とか理性とか、そんなものはどこかに行ってしまった。

あたしは薄汚れたセーラー服を、その場で脱ぎ捨てる。

着方なんて知らない。けどそれだってあたしを留まらせる理由にはならなかった。薄い順に三枚の着物を羽織って、帯らしきものを無造作に結ぶ。

おかしい気持ちになった。

まるで、自分が自分でなくなるかのような。

この気持ちは、なんだろう。

ただ横たわっているだけなのに、これほどまでにあたしの心を支配して、決して消えることのない少女。

触れたい、と思った。

あたしは何かに操られるかのように、人形に近づいていった。

背の低い柵など容易に越えて、ディスプレイに上る。

初枝という名の少女を、いつもよりも間近で、見た。

綺麗だった。

黒く長い髪は無造作に咲き誇り、紅い着物は清らかに乱れて存在している、それだけなのに。

この気持ちは、なんだろう。

あたしはそうっと、金の布の上に横たわった。

彼女の隣に並ぶのではなく、彼女の反対側から、まるで違う存在であることを強調するかのように。

目の前に、白く細い手。

少し伸ばせば触れられるところで、あたしを呼んでいる。

手を伸ばした。

後ろめたさに、どうしようもなく高揚する。

あと少し。

あと少し。

あと少し。

とうとう、触れた。

*

この想いを、なんと呼べばいいのだろう。
近くて遠いのは、憧れ。

もしかしたら、焦燥、嫉妬……恋、のような何か。

わたしは立ち上がった。

長い髪を後ろに払い、乱れた着物を整える。

金の布の上、気が遠くなるほどの長い間、わたしが横たわっていた場所に、新しい人形の姿。見慣れたその姿を、見下ろした。

茶の着物に、短い髪。うつろな瞳は、幸せであるようにも見える。どちらにしろ、わたしにはもう、関係のないことだ。

「初枝」

わたしの名を呼ぶ、愛しい声。

願いをかなえてくれた、大切なひとの声。

わたしは微笑んで、声の方へ歩き出した。

了

（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

これは、『小説風景12選』（9月）参加作として、乙麻呂先生のイラストに物語を加えさせていただいたものです。

同じイラストに、複数の書き手が異なった物語を執筆しています。よろしければそちらもご覧下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8488e/>

コガレ

2010年10月17日14時38分発行